

「地域と連携した取組」

「市民ネットワークによる

カスミサンショウウオの保護活動」

大学では、これまでから地域の人たちと様々な形で協働事業を進めてきました。なかでも齊藤教授を中心に進めているカスミサンショウウオの保護活動は、今年で6年目を迎えています。



齊藤 修 教授

は、地域の人たちや自治会、企業等に声をかけ、翌年、保全のためのネットワーク「田村山生き物ネットワーク」（会長…齊藤修教授）を立ち上げました。

活動当初から事務局長として携っている松居繁隆さんは、「以前から、子どもたちに地域の自然を残すことは大切だと考えていましたし、環境問題や希少種の保護についても興味があつたので、齊藤先生の話に共感し参加を決めました。バイオ大学の先生が、ここまで地域のことに関心だとは、びっくりでした」と当時を振り返ります。

皆の手で守ろう

カスミサンショウウオが死滅

カスミサンショウウオは、平地や丘陵地を好んで生活することから、人間との接点が多く、土地開発の影響を強く受けるため、滋賀県版レッドリストでも3番目に絶滅が危惧される希少種です。

齊藤教授が田村山の水路でカスミサンショウウオの卵を発見したのは10年前のことですが、発見から4年後の平成21年、繁殖水路の崩壊と雨不足による水枯れで、幼生5千匹が全て死滅する事態となり、保護活動はここから始まりました。齊藤教授

ネットワークの最初の活動は、水路が枯れないように水を足していくことでした。1トンの水が2日でなくなる厳しい状況で、水漏れ防止の水路補修作業を行い、さらに市の補助を受け井戸を設置して、水の供給に目途をつけました。そして、ザリガニ除去や啓発看板の作成などを地道に進め、カスミサンショウウオが住みやすい環境を徐々に整えていきました。

さらに地域の人向けに学習会を実施することで、カスミサンショウオを意識高く見守ってもらえるようになり、また次世代へつなぐため、

「学外活動の取組」 「長浜町家キャンパス」



長浜バイオ大学町家キャンパス

長浜中心市街地北国街道沿いに、大学の町家キャンパスがあることをご存知ですか。

町家キャンパスは、学生たちが授業以外でも恒常的にまちなかに出かけていき、自由に活動ができるよう、平成24年に長浜バイオ大学が古民家を借り受けたものです。学生たちはここを拠点に、地域と連携しながら、今年も3つのプロジェクトを展開します。

①長浜魅力づくりプロジェクト

このプロジェクトでは、学生たちが地域の人と意見交換をしたり、まちなかのイベントに参加しながら、

文字どおり長浜の魅力をつくる活動を行っています。

昨年は、「脱出ゲーム」と題し、現代へタイムスリップした戦国時代の商人が、指令書に基づき、商店街のあちこちに隠されたキーワードを時間以内に解ければ、戦国時代に戻れるという設定で、参加者がまちを歩くことで魅力再発見につなげました。

この企画・運営の学生リーダーを務めた小浪海峰さんは、「14人の参加学生の時間調整やモチベーションの違いに苦労しましたが、優しく温かい地域の人に良いアドバイスをもらいやり遂げられました。たいへん良い経験となり、機会があればまた参加したい」と話しています。

今年も子どもたちを巻き込んだ楽しい活動を提案しようとして協力を進めています。



小浪 海峰さん

②科学実験を身近に

自主活動サークルEntrance to Scienceでは、難しいイメージの科学実験を身近に感じてもらうと、市民と学生を科学でつなぐ活動をスタートさせました。



田村山生き物ネットワークのみなさん

地元の高校に声をかけ、保護活動に参加してくれるようにもなりました。

住民が土地を提供 保護池で見守り

さらに保全策を適切に進めるために、集団の生態と遺伝子系統を調査した結果、田村山のカスミサンショウオは特徴的な存在であることが判明。平成25年、寺田町の三田村さんから土地の提供を受け、保護池を造成し、毎年、環境整備活動を行いながら、水路から保護池への移植がうまくいくかを見守っているところです。今月、7月18日午前10時15分から、田村山麓の保護池で観察会が予定されていますので、興味のある人はご参加ください。

希少種を見つけ保護と調査を進め



Entrance to Scienceの講座

今年の講座は、「色」がテーマです。例えば「黄色」なら「花粉」、「硫黄」、「タンポポ」と黄色で身近なものを題材にして、花粉症のしくみ、硫黄を原料にした製品やタンポポの在来種と外来種の見分け方など、学生たちが研究してきた内容に参加者に教えます。今後毎月1回程度、地域の人を対象に「色講座」を実施していく予定です。

③長浜人の地の酒プロジェクト

今年1月、新酒「純米吟醸 長濱」が発売されました。これは、第3セクター黒壁が企画し、地元米農家と酒蔵元、そして長浜バイオ大学が連携して、長浜の風土に根ざした地酒づくりに取り組んだものです。

このプロジェクトに参加した教授や学生は、酵母の安定生産の研究の

たい大学と、身近な地域環境を保全したい住民、様々な知識を得たい学生が一体となって取り組むこの活動は、昨年3月、優れた地域環境保全活動をたたえる「しが生物多様性大賞」で大賞を受賞し、ますます活動が広がっています。

そのほかにも、「養殖ビワマスの飼料研究」、「植物工場の構築によるツブリナの誕生」など大学の知の財産が活用された取組は様々あります。

齊藤教授は、「地域に大学があることは稀で、住民にとっては財産のほず。私たち大学側も地域に目を向け出ていくべきだし、地域は、もつと大学に協力を求めてもらいたい」と協働の取組を呼びかけています。



保護池の環境整備活動

ほか、地酒を全国発信するためのプロモーションビデオの製作を担当しました。

プロモーションを担当した学生たちは、ストーリー性がうまく出せず製作は難航。商品の魅力を伝えることの難しさや、きちんと売れる商品を作ることの戦略とプロのこだわりを学びながら、若い感性でしっかりと創りあげました。

長浜にはこうした大学があり、県外から来た学生たちがたくさん学んでいます。外からの視点で長浜を見つめ、地域の資源や素材を活かしたモノ作り、風土に根付いた文化・技術の継承をとおして地域の活性化につなげる取組が今年も続きます。

皆さん、学生たちのエネルギーを借りてみませんか。一度、町家キャンパスのドアを叩いてみてください。



長浜人の地の酒プロジェクトの田植え